

---

# 夢を忘れた眠り（午前零時の再放送）

北極猿

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夢を忘れた眠り（午前零時の再放送）

### 【Nコード】

N9794D

### 【作者名】

北極猿

### 【あらすじ】

家族と離れて過ごしていた>僕は、祖父の葬式があるからと、数年ぶりに実家に戻る。そこで待っていたのはいくぶん辟易とする、昔と変わらない家族の姿だった。歳を追うごとに他人のようになっていく弟、孤立する父らのあいだに挟まれながら、>僕はやはり、ここは自分のいる場所ではないと感じる。しかし実家を離れる前の晩、弟が一本のカセット・テープを持ち帰ってくる……。

## 第一話（前書き）

この小説は企画小説です。「眠小説」と検索すると他の先生の作品も読むことができます。

## 第一話

八月まで梅雨が長引くと言われていたのだが、弔問の日は運よく晴れ渡った。僕はうちの家族とちやちな菜園の柵をまたぎ、くさいきれのする裏庭を抜け、通りで父親が車を回してくるのを待った。向かいの林では、鳥たちがばたたと羽を踊らせて枝から枝へと飛び移るのが見て取れ、枝がしなるたびに路上に水滴が垂れた。外は紛うことなき真夏日だった。弟は額に浮かんだ汗の玉を手の平でぬぐい、顔をしかめて濡れた草むらに唾を吐いた。

「なにか飲みたいんなら今のうちだよ」と母は弟に言った。

弟はいらないという風に首を振り、喪服のネクタイを手でおさえ、もういちど唾を喉に溜め、草むらにぺつと吐いた。ちょうどそのとき、アスファルトを立ち昇る陽炎の向こうに、普段は母親の運転する白のトヨタ・イストが見えた。母親が車に向かい手を挙げ、そのあとで僕と弟に荷物を手に持つよう指示した。母が助手席に座り、我々兄弟は後ろに席をとった。車に乗ってすぐ、父親がこちらに振り向いた。

「いいのか、なにか飲み物を買っておかなくて」

「いらないよ」と弟がぶっきらぼうに答えた。「だってすぐだろう？」

「いいんじゃないけど——すぐじゃない。一時間はかかる」

バックミラーに調整を加えたあと、父親は車を発進させた。母が飴を食べないかとバッグの口を開けたが、全員が首を振った。しばらく沈黙が続いたあと、ふたたび弟が口を開いた。

「ねえ、なにか音楽をかけてよ」

父親が気乗りしない感じでカー・オーディオのスイッチに手を伸ばしたのだが、母親がそれを制止し、ダッシュボードからCDを二三枚取り出した。

「こっちがいいんでしょう？　どれ？」

「ストロークス、ない？」と弟は訊いた。

「どれ？」

「S——T——O——」

「これかな？」

母親がジャケットをのぞかせたが、間髪入れずに弟が違うと指摘した。

「白いやつだよ。たしか、ほら、イズ・デイズ——」

「その左手に持ってるやつ」と僕が母親に指差して教えてやった。

「でもちよつと貸してみて。中身が違ってるかもしれない」

やがて曲が流れ出した——「Hard To Explain」。

車が薄暗いトンネルに差し掛かり、僕は少し眠ろうと目を閉じた。

けれど会話がないことに耐えかねたのか、母親がもつともらしくせわしげに弟の名前を呼んだ。

「なに？」と苛立たしげに体を起こす。

「あの子とはまだ付き合ってるの、ほら、なんていったっけ——」

「誰のことを言ってるのか全然わからないよ」

「よくあんたたち二人と遊んでくれたじゃない。うちに夕ご飯を食べに来たこともあった」

僕と弟は顔を見合わせた。それからほとんど同時に「ああ」という低い声を出した。

「今村くん」と僕は言った。「たしかふたつ年上だった」

「あの人なら福岡に転校したよ。大昔の話だ」と弟がうんざりしたように言った。

「じゃあ先月うちに来たのは誰なの？ 祐二くんはいませんか？ って。あの子の名前がたしか今村くんじゃなかった？」

「あれは——」と弟が言いかけ、もどかしげに舌打ちした。「ていうか、そんな話はもういいよ。あれはちよつと金のことと話があっただけで——」

「だってちよくちよく電話が来るんだもの。しょうがないじゃない」「人に金を借りるんじゃない」と父は口を挟んだが、弟は答えなか

った。

「あんたにもそろそろ同窓会の連絡が来るんじゃないの？ やっぱ  
りお兄ちゃんの時きも——」

「うるさいな。同窓会なんて行くもんかよ」と弟が突っぱねた。

「葬式の日くらい仲良くしなさい」その声は父らしい威厳を求めようとしたが、うまくいかなかった。「それで結局、飲み物はいいのか？ どうなんだよ」

「葬式の日くらい説教されずにいたいね」と負けずに弟が言い張った。

「やっぱりちよつと寄って行こう」埒が明かなかったので僕が提案した。「その先に酒屋があるから、なにかそこで」

家からまだ五キロも離れていないというのに、みんな段々と不機嫌になっていた。酒屋に着くと弟と母親だけが車を降り、僕は父といつしよに車の中に残った。別の車が我々の車のすぐ横につけ、中に乗っている人間たちの服を見て誰かが死んだのだと悟った。父親はそれまでハンドルを指の先でとんとと打ち鳴らし、思いつめたように前だけを向いていたのだが、突然くるりとこちらに振り向くと、シートに腕を置いて僕の顔を見た。

「あいつとはやっぱり仲が悪いのか？」といくぶん切り出しづらそうに父は言った。

「あいつって？」

父親は顎の先を酒屋の方にちよつと動かした。弟のことを差しているのだ。

「別に」と僕は答えた。「そんなことはないけど、全然」

でも僕の答えなんて、父はどうでもいいみたいだった。父親としての尊厳を、せめて僕の前だけでも示しておきたいらしい。

「一体いつから親にあんな態度をとるようになったかな」父は首をひねり、それらしい理屈を持ち出してきた。「やっぱり高校を辞めてからか」

ずいぶんと古い話を原因にこじつけるものだなと思いながら、父

の自負心を納得させるために相槌を打った。弟が買い物袋を持って戻ってくると、父親はなにこともなかったようにまた前を向いた。母が袋の中から好きなものを選べと言うので、僕は冷えたレモン・ティーを手にとった。そのうちのひとつ、いかにも甘ったるいコーヒ―牛乳は全員が車を降りたあととも後部座席の端に置き去りにされ、誰にも見向きもされぬままぐつしよりと葡萄のような水滴を身につけることになった。

「どうせならうちに住めばいいのに」母はひとりごとのように言っただと、くるりとこちらに振り向いた。それから同意を求めるように父親を見る。またぞろ例の实のない議論を繰り返そうというのだ。「ねえ、そうじゃない？ 月々七万円も家賃を払うなんて馬鹿らしいったらありやしない」

父はどちらともとれる、首を少しうつむけた程度の相槌を打って、バックミラー越しに僕と目を合わせた。「帰るときに今度こそちゃんと住所を書いておきなさい」

「それでまた冷蔵庫のドアに貼るんだ。ペンギンの磁石をくっつけてさ」と弟が冷やかしを送ったが、それについては誰もなにも言わなかった。

「うちに帰ってくればいいのに」としつこく母が言った。「それで家賃の分をうちに入れてくれれば――なにも七万円も入れて欲しいって言うんじゃないよ。それでも――」

「こっちに住む気はないよ。もうあきらめて」

「どうして」

「仕事を変えたくない」と僕は言った。

「うちからだって十分通える距離じゃない」

「そんなどうしてわざわざ仕事場から遠ざからなくちゃいけないんだよ」と僕はほとんど吹き出しながらそう言った。

「だから家賃が浮くでしょうが」

どう返そうと切りがない。僕は苛立ち始めていた。

「ねえ、とにかくうちには住みたくないんだよ」と僕は荒っぽく声

を上げた。そのときはとても話のだしに使われる気分ではなかったから。「誰にも干渉されたくないし、ひとりが好きなの。こっちにいたらまたつまらない連中につきまとわれる羽目になるかもしれないだろう？ 昔は仲が良かったけど、いまは本当に軽蔑してるんだから」僕は額に手を置いて、ゆっくりと深いため息をついた。「ああ、まったく。お願いだからこんなこと言わせないでくれないかな」「お母さんもいい加減にしときなさい」と父が割って入った。「相手はもう子供じゃないんだから」

「だって」と言いかけるが、そこで口をつぐむ。「その方がこれから先色々——」

「ねえ、そこ左だろう」と弟が出し抜けに声を発した。「葬儀場の看板が出てる」

車は急いでハンドルを切って交差点を左に折れた。そのときちょうど薬局の駐車場から出る車と鉢合わせて、クラクションが辺りにやかましく鳴り響いた。一瞬ひやつとした空気が車内に下りた。みんながみんな平常心を欠いていた。

「もう、びっくりした！」と悲鳴に似た声で母が叫び、驚きのあまり胸に手を置いた。「お父さんもなんでそんな運転するの」

「もう誰もなにも話すな」と父親は冷ややかに言ったが、声は震えていた。「次に誰か口を開いたら、車から放り出してやる」

「やれやれ」

父はきつとした目で弟を見たが、元のように運転に意識を集中した。

## 第二話

葬儀のあいだ中、ずっと車の中で聴いていた音楽が耳を離れなかった。見たことのある顔ぶれが部屋を満たし、誰かが早晚涙を流さなければいけないだろうとばかりに、ときどきはお互いにちらちらと目を配った。中には僕と歳の近い従兄弟やなんかもいたけれど、親戚付き合いの悪いせいで、ほとんど顔すらもまともに覚えていない。覚えてるのはなにかの席で親戚一同が荒川区の祖父の家につどい、そのあいだ中ずっとひとりの、それも十歳にもなる少年が母親にしがみついていたということだけだ。

形式ばったあれこれのあと、我々は焼き場に移った。釜の周りを取り囲み、それぞれが死者に別れの言葉を投げかけた。このときになって初めて何人かが涙し、それ以外がほつと胸を撫で下ろした。その何人かの中には僕の父親も含まれていた。父の顔はなにか、避けようのない悲劇に押し迫られてでもいるかのような切迫さを帯びていた。まるで祖父の体が焼かれるその瞬間に立ち会うことで、祖父の死をようやく理解したとでもいうような。

父は順番が来ると我々兄弟を凄まじい力で抱き寄せ、血走った目できれぎれにうめき声のようなものを上げた。

「……これが最後なんだからな……最後なんだぞ……」

でも腕の力が緩んだときには、父親の体は小さくしぼんでいた。涙をぬぐう気力すらなくしてしまっただよに見えた。僕と弟はごつごつとした腕から逃れ、いささか当惑しながら死者に別れを告げた。「お父さんの気持ちもわかってあげなさい——それであなたのお休みはいつまでなの？」と母が小声で言った。先ほどの議論をこんなところでまでしつこく繰り返そうというのだ。

「八月の二日まで」と僕は答えた。

「なによ。全然ゆつくりできないじゃない」

そのとき「おい」と父親のきつい声がして、僕と母は口をつぐん

だ。目は真っ赤になっていた。でもその一言を絞り出してしまつと、父はまたもこのようにうつろに焼き釜に視線を向けた。

「なにをむきになってるんだか」

「そつとしておいてやれよ」と僕は弟に言った。「今はそういうことを言うべきじゃない」

それが四時だった。一同はそのあとで天井の低い宴会場みたいな場所に押し込められ、あらかじめ用意されたビールと寿司を完食する作業に取り掛かった。先ほどのまでの悲壮感はどこへやら、父はビールを口にするなり多弁になった。とは言え、それは我が父だけではなく、周りの人間もまったく同じことだったのだが。

幼いころに見たことがあるきり顔を合わせなかった従兄弟のひとり、廊下で「いま何時かわかりますかね？」と僕に訊いた。

「四時十二分です」

「よかった」と彼はほつと息をついた。「まだ間に合うよ。ありがとう」

僕は思うのだけれど、葬式とはやはり生ある者たちのもので、決して死者だけのためのものではない。それどころか、ときには誰のためにもならないことすらあるのだ。

やがて歳をくった兄弟たちのどつという笑い声。狭苦しい部屋では全体がひとまとまりの熱となり、天井が割れんばかりの騒ぎとなる。誰かの笑い声に声が重なり、腹がびりびりと震える。空になったビール瓶が次々とどこかに下げられ、また同じだけの酒が提供される。僕と弟はちょうど人々に迫られるように端っこに席をとり、隣にたまたま居合わせた、遠い昔に原っぱで球蹴りをしたことのある従兄弟たちと会話した。そのうちのひとりが例の親離れしないかつての男の子で、その話を僕が持ち出すなり、みんなはどつと笑った。

「しょうがない。まだ子供だったんだよ」と彼は言ったが、周りの指摘を受けて口ごもった。「——というか、昔から上がり症だった

から」

「甘えん坊だったって、はっきり言えばいいのに」そのとき別の席にいた彼の姉が大声を上げ、みんなは笑った。

姪っ子に当たるひとりの少女は、祖父の亡骸を見てわけもわからず泣き出してしまった。ところが骨だけになったあとになると、今度は見せて触らせてと母親にせがんだ。今や男たちは腹を満たすことに夢中になり、女たちはお喋りに夢中になっていた。誰も死者のことについては触れようとしめない。あるいは思いつきさえしなかった、というべきか。

とおりいつぺんの義務を果たし次第、僕は席を外そうと思っていた。というのは後に用件を残していたせいもあるし、酒が入るにしたがって、周りの状況に我慢ならなくなるだろうとも考えていたからだ。別に祖父の死を重く受け止めていたとかそういう風ではなく、とんでもなく酔っ払ってしまいかでもしないと、ひどく退屈してしまっただろうと感じたからだ。そしてそのうちに、思っていたとおりの心境になった。最後までこの場に居残る羽目になることだけはなんとしても避けたかったので、早いうちから弟にそれとなく声をかけた。

「何時に帰る予定？」

弟は顔を上げた。それからなにかを思い出すように視線をうつろわせ、その途中に大きくあくびした。

「もう帰りたい」と彼は頭を掻いた。「ずっときちつとしてたし疲れた」

「なら途中までいっしょに帰ろう。おれも帰りたいと思ってたから」僕は立ち上がった。「でも最後にいちおう何人かに挨拶しとかないと」

「いいよ。誰とも話したくない」

弟はむすつとした顔で立ち上がり、侮蔑するような視線で周囲を見渡した。僕はちよつと迷ってから、それが特に問題になることもなからうと考えて、そのまま出口へ足を向けた。少しして振り向く

と、弟は姪っ子に呼び止められ、その小さな手を掴んで上にあげたり下げたりをやっていた。もつと遊んで欲しいとせがむ姪に、今日はもう帰らなくちゃと弟は説明した。

「じゃあまた遊んでくれる？」

「いいよ。もちろん」と弟は微笑みを浮かべながら優しく言った。

「じゃあいつ？」

「いつでもいいよ」

「じゃあうちに遊びに来るんだよ？」

「じゃあ」と弟は反復した。「それまでおうちでいい子にしてたら、今度は好きな玩具を買ってきてあげる」

「じゃあ熊がいい」

「わかった。覚えておくよ。本物？」

弟がそう言くと、子供は無邪気に笑った。

外に出てから僕らはそろって煙草に火を点け、通りでタクシーを待った。

「母さんにはあとで電話しておく」とネクタイを緩めながら僕は言った。

弟は肯いて灰を地面に落とした。

「さつきからなにか考えてるの？」と僕は気に掛かったので訊いてみた。

「いや、別に」と弟は言いかけたが、首を振って続けた。「――そりゃあ今日のことだよ。というか、昔のことか」

「じいちゃんのこと？」

弟は肯いた。「うん、まあね。やっぱりおれと兄貴がいちばん可愛がられてたしさ」

そのような感傷性がこの場で弟の心に生まれようとは思ってもみなかった。というのは、弟がなにかにつけ「安っぽい」とかそういう言葉を口癖にしていたからだ。僕は通りへ一歩身を乗り出し、タクシーが来るのを今かと待った。台風五号の到来で、早くも空が濁

り始めていた。

僕は後ろを振り向いて弟の顔色をうかがった。

「そういえば親父が心配してたよ」と僕は打ち明けた。

「心配ってなにを？」

「おれたちの仲が悪いんじゃないかって」

「まったくあほらしいな！」と弟はふきだした。「いつもそうやって――」

弟はそこで言葉を切り、素早くタクシーに向かって手を挙げた。

それから考え深げに僕を見た。

「親父も寂しいんだろうな。要するにどっちかを自分の味方につけたがってるんだよ」

### 第三話

タクシーの中で思いもよらず昔話に華が咲いた。弟とそんな話をするのはほとんど初めてのことだった。

子供のころ、両親は僕に愛のほとんどを捧げてしまったから、弟の取り分は自然と少なくなった。それは「おねしょ事件」の例が常から代表に挙げられる。僕の両親は当時女の子を欲しがっていた。三人目を持つ余裕は今後発展する父の経済力を計算に入れても難しかったから、どうせならと娘を欲しがったのだ。

けれど生まれてきたのは男児だった。二人は落胆し、うまく現実を飲み込めないままその子の成長を見届けた。両親はなにかにつけ想像力を欠いた人たちだったから、なにもかも前もって形式的に身の振り方を決めておかねばこれといった決断を自分たちでは行えなかったのだらう。両親に限ってではなく、この手の人たちは目に見えるものにしか価値を見出せないのである。

そしてその結果、弟は自然と劣等感をおぼえ、弱気な幼少時代を送ることになった。いつでも母の手にしがみつき、午前のだいど託児所に預けられると、必ずといっていいほど半時間あまりを泣きわめいて過ごした。手を焼いた保育士たちはなんとか気の合う友達を作らせようと幼児の群れに弟を放りこんだのだが、これがまたまずかった。自由奔放に育った他の子供たちに比べ、弟はあまりにも人間に慣れていなかったのだ。それが原因で弟は昼寝の時間おねしょやうんちを繰り返すことになるのだが——おねしょに限っては実に十三歳まで続いた。

「懐かしいな」と弟は言ったが、無理して言っているのは明白だった。彼は咳払いのようなものをして、「というか——」といいかげんに話題を転じようと試みた。

「というか、なに？」

「いや、やっぱりいい——ちがうよ、ちょっとそのころの心境を思

い出しただけ。おれの目に兄貴がどう映ってたとか、その反対も」

弟が僕に対して長いあいだ劣等感を抱いていたことはたしかだった。弟はずっと母親のそばにまわりついていたし、そうでないときは僕の横にぴったりとくっついてるのが常だったからだ。でも思春期を過ぎると、彼が自分自身を確立するのにそう時間はかからなかった。何年かするうち、弟は父親を含め大人と対等の口を利けるまでになった。彼も僕とはまた別の道を辿り、いっぱしの人間としての自尊心を手に入れたというようなわけである。

「さっき考えてたことを話すよ」突然弟はそう言つと、決意を込めた目で僕を見た。心なしか目に怯えのようなものが走る。「実を言つと、ちよつと金を貸して欲しかったんだ」それから言いわけするように付け加える。「すぐ返せるから」

「いくら？」

弟はぼそぼそと金額を言つた。

「いいよ。いつ返せる？」

「八月中までには、なんとか」

しばらくのあいだ沈黙が続いた。弟はどうしたものかという風に咳払いを交え、その果てになんとか思い出話をひとつ引っぱり出した。

「昔にさ、よく三人でラジオのDJをしたのつて覚えてる？ おれと兄貴と今ちゃんて」と弟は言つた。「わざわざ夜更かしして、カセット・テープに声を吹き込んだのを」

「覚えてる」

「あれ、どこにいつちゃったのかな」と弟は真剣な顔つきをこちらに向けた。それから唐突に指を鳴らした。「ちがう、あれはまだ田端にいたところだったから——」

「そうだね」と僕は同意した。「テープがあるとするなら……」

「西尾久の家だ」

「だろうね——間違いない」

弟は迷うように自身の唇に指を置き、タクシーが信号で停まると

運転席まで身を乗り出して進路変更を伝えた。

「やっぱり田端まで行ってください」

「駅まででいいの?」とこちらに半分顔を向けて運転手が言った。

「ええ」

本気なのかと僕が訊くと、いい機会だからと弟は答えた。たぶん今日を逃したらあのテープがふたたび日の目を見ることはないだろうから、と。僕はちよつと躊躇してから「ねえ、悪いけどおれは行けないよ」と言った。

「どうして」

「ちよつと予定が入ってるんだよ。それにまだ残つてるとも思えない」

「なんだよ、つれないな。これからすぐ?」

僕は肯いた。「人と会わなくちゃいけない」

「でもさつき——」

「そういう連中じゃなくてさ」僕は腰を浮かせてヒップ・ポケットから財布を取り出し、先ほど弟の言った金額をひっぱりだした。「おまえも知ってる人だよ。ヒントは男じゃなくて誰とも一度も結婚してない。ほら」

弟は金を受け取って、返済のめどを同じように繰り返した。

「助かるよ。恩に着る」弟は努力して、淡い微笑みのようなものを浮かべた。

「その建物の前で停めてください」と僕は運転手に言った。タクシーは減速して指示されたとおりの地点で停車した。「おれはここで降りるよ。じゃあまたあとで」

約束までにはまだかなり時間があつたから、僕はチケットを買って映画を観た。とある剣士が幕府の陰謀に巻き込まれて一族共々没落し、なんとか生き長らえた息子が復讐を完遂するというありがちな筋の映画だった。風評どおり後半に至ると興ざめの連続だったから、きりのいいところで席を立ち、無人の廊下を歩いて外に出た。

けれどむっとする風を首元に感じて引き返し、ドアのそばに置かれたベンチに座って彼女に電話を掛けた。

「もしもし——ねえ悪いんだけどいまちよっと話せない——あとで掛けなおすから——」

そこで電話は切れた。こちらになにか一言発する余裕を与えることなく。

僕はおもむろに立ち上がって中を見渡した。それからあきらめてまた腰を下ろした。引き返してもう一度映画を観ようかしらという気になったのだけれど、何十という頭がいっせいにこちらを振り向くことを想像して断念したのだ。結局そばの売店で月刊ファッション誌を買い、コーヒーショップで煙草を六本吸った。サンドウィッチを食べたあとでさらに四本吸った。それでもまだ約束の時間までにはきっかり一時間あった。

「ねえ、ちよつと時間を早めない？」と今度は相手になにかを言わせる前に、こちらが言い切った。「無理だったらいんだけど」

「いいよ」と彼女は明るい声で言った。先ほどと比べ、あっけらかんとした体である。「どこで落ち合う？」

「いまどこにいるの？」

「ちようど会社を抜け出してきたところ。自分は？」

「三越のそば」

「十分で行く。待ってて。ねえ、あとで電話するからそのあいだに——」

太陽が駅の方角に遠のいていき、それを潮に通りは半袖のシャツにネクタイという人でこった返した。都市のぼやけた輪郭の端々に明かりが灯され、あくせくとした昼に代わる安堵と冒険気分が辺りに漂う。人や車やそれ以外のもののあいだを縫うように歩き、僕もまた周囲と似たような心持ちで通りを歩いた。長く延びたクラクシヨンが辺りに鳴り響いて宵闇にさらなる昂りを付与し、誰かが誰かを呼ぶ声、大衆酒場の呼び込み、その他にもひっきりなしに見ず知

らずの断片的な会話が耳に飛び込んでくる。時計の針が七時ちょうどを打つのとほとんど同時に、僕は人ごみの中で彼女の姿を目に認めた。そのしぐさ――歩き方から表情まで、なんともいえず懐かしみを帯びている。僕は彼女の方に向かって手を挙げかけたが、気を変えて後方に回り込んだ。

## 第四話

ひとみ、というのが彼女の名だった。実際の彼女を見れば、多くの人がある名前前に納得するのではないかと思う。その両眼は、文字通り彼女自身だと言ってもいい。その一對の巨大な目が彼女という人格を余すところなく相手に伝え、また同時に彼女自身の人格をさえ絶え間なく作り変えていくのだ。

突然とんと両肩に手を置かれたので、彼女は悲鳴を上げる代わりに大きく息を吸い込んだ。

「びつくりさせないでよ」と彼女は振り返って言った。それからおどけるように目を丸くする。「死ぬかと思った」

「仕事はよかったの？」

「今日の分はもう終わったからいいの」言いながらひとみは僕の腕をとって、通りの端に寄った。「雨が降らなくて良かった。傘を持つてこなかったから」それから唐突に打ち明けた。「ねえ見て、今日ここにここにコーヒー零しちゃったの。もう最悪！」

胸のところに大きなリボンのついた白いブラウスを指先でつまみ、憤然たるさまで彼女は服をのぞきこんだ。「ほらね。もう絶対に落ちない」——たしかに腰骨の辺りに茶色いシミができている。ブラウスには袖というものがほとんどなく、肩からつると腕がのぞいていた。開いた胸の部分に、見覚えあるかたちのネックレスが見える。

「で、どこに行くの？」

「大した店じゃないけど、いちおう席はとってある」

僕は予約した店に向かって歩き出した。みるみるうちに宵の空が深まりを見せ、都市の明かりがぼんやりとその頭上に浮かび上がった。通りが人で狭くなると、僕は彼女の肩に腕を回してぐっと自分の方に引き寄せた。やがてほっそりとした腕が遠慮がちに、しかし親密みを持って僕の腕にからめられた。信号で立ち止まっている

と彼女がしつくりこない表情をこちらに向けたので、僕は上着を脱いだ。

「わたしね、駄目って気づいたの。もう面倒になっちゃって」

彼女の言わんとするところを察して、僕は肯いた。

「よくわかるよ。女の子ってそういうものだ」

「そうかな？　わたしは自分が特別だって思っていたから」と彼女は言い、迷うように付け加えた。「世慣れたなんて言うつもりはないけど、もう女の子じゃないの」

「そうか」

しばしの沈黙があつた。信号が青になると、彼女は僕から離れた。「先に信号を渡って。あとからついていくから」と暗い声でひとみは言つた。

「嫌だよ。いつしよに行こう」

「そんなにびつくりした顔しないで。冗談なんだから」彼女はにっこりと笑い、ふたたび僕の腕に腕をからませた。「わたし、本当はなにも変わってないの。それがなんとも厄介なことなんだけれど」

地下にある小綺麗な居酒屋に、僕らは向かい合せて座つた。店の中も例に漏れず賑やかだったから、酒が入るまでそわそわと落ち着きなくメニューに目を這わせた。廊下を軋ませながら店員がやってきて、うつむいたまま注文をとつた。

「お先にお飲み物をおうかがいいいたします」

「なに飲む？」とひとみがこちらに顔を向けた。「わたしはビール」「生ビールをジョッキでふたつ」と僕は店員に告げた。「あれ、前にビールは飲めないって言ってなかったっけ」

彼女は首を振つた。「最近飲めるようになったの——えーと、あとこれもらえます？」

ぼそぼそと注文を繰り返して、店員が部屋の戸を閉めた。

「いつから？」

「なにが」

「ビールを飲めるようになったのって」

「わからない。でもね、おかげで今やうちの中は空き缶でいっぱい」  
彼女が笑うと、目の端にあどけないしわが浮かんだ。昔に友人たちとのあいだで、ひとみの肩を小刻みに震わす笑い方が嘲笑のネタになったものだけれど、今ではかえってそれが相手に秘めたる少女性を匂わせる一種の媒体の働きを示している。

四方八方で宴会みたいなものが開かれていたせいで、僕らの様子はひそひそ話をしているように見えたはずだ。まるで招かれざる客が、もうひとりの似たような存在を見かけて思わず声をかけてしまった、というみたいに。でもあれやこれやとお互いで話題を持ち出した末に、どうにか話を軌道に乗せることができた。そのうち彼女の頬が赤みを帯びて、話す声にも昂りが見て取れた。席を替えて隣り合わせに座ると、ひとみの手が僕の手覆うように重ねられた。

「ねえ」と彼女は甘い声でささやき、僕の肩にそつと頭を載せた。

「うまくいくと思う?」

「なんのこと」

「全部のこと。わたしたちが昔以上にうまくいくかどうかってこと」  
僕は相手の肩に腕を回して、首から下がった彼女のネックレスをつまみ上げた。

「これってやつぱり——」

彼女は僕の目を見てうなずいた。「そう、ちゃんと覚えててくれた? 君が自分でくれたんだからね」

「覚えてるよ。すぐく昔の話みたいに思えるけど」

「わたし、まだあのことのお金返してもらってなかった気がするな」と彼女はからかうように言った。「いったいいくら取られたの?」

「さあ。でもその話はあんまりしたくないね」

「仕返ししたい?」

「いや」と言つて、僕は間を置いた。「どっちかっていうと、もう関わり合いになりたくない」

「だから地元にも帰りたくない?」

「この話、もうやめよう」僕は彼女の体から離れ、手を伸ばして勘定書をとった。「暗くて見えないや。そっちの明かりに照らしてみ  
て」

ひとみはバッグから携帯電話を取り出し、画面の明かりを近づけた。

「今日はわたしが持つ」と抑揚のない声で彼女は言った。  
「いや、いいよ」

僕は店員を呼び、勘定を払って立ち上がった。

「君のうちまで送っていくよ」  
「このあとはなし？」

僕は答えなかった。通りに出てタクシーを捕まえ、行き先を告げると、あとは目をつむって静かにしていた。外には湿っぽい、勢いのある風が出始めていた。

「ねえ、怒ってるの？」彼女の声がこのとき初めて切迫さを帯びた。  
「さっきのことなら謝るから許してよ」

「違う。怒ってるんじゃないんだ、本当に。ただなんというか、考  
えてるだけで――」

「なにを」

「それについて話したくないんだ」

タクシーが停まり、彼女が降りた。

「ごめんね」とひとみは言い、とりなすような淡い笑みを浮かべた。  
「あとでメールするから」

彼女は軽く手を振り、こつこつと足音を立てて小路を歩んでいった。タクシーがふたたび発進し、僕は行き先を告げた。

## 第五話

それから少しして嵐の幕が上がった。風が電線を上下に激しく揺すり、時おり突風と共にイナゴの大群を思わせる雨が窓を打ちつけた。カーテンに浮かび上がった庭木の影が落ち着かなく首を振り、雷が鳴ると遠くから甲高い悲鳴が聞こえてきた。僕は窓枠に指を置き、カーテンの隙間から絶え間なく流動する暗色の雲を見上げた。部屋はなにからなにまでむっとする湿気に包まれていた。

「お茶でも飲む？」と母が後ろから声をかけてきた。「それでね、お母さんなんて言われたと思う？」

「さあ。すごい雨だね」

「ほんと。屋根が吹き飛ばされなきゃいいけど」それから母は気の利いたことを言ってみたみたいにひとりで笑った。「それでね——大叔母さんよ、あの人がわたしに——」

僕は生返事をして居間の戸口から首を出し、廊下と向かいの部屋をのぞき見た。

「ねえ、親父はどこに行ったの？」

「上じゃないの？ 知らない」母はふたたび声を落とした。「あの入って苦手、好きになれない。大叔母さん。みーんなそう言ってる人をつかまえてわざわざ嫌味を言うんだから。それで今日わたしね、あんまり腹が立ったから言っちゃったの、『でもうちはできる限りのお金は工面しましたよね？』って。入院費だって払ったし、葬儀代だって三分の一はうちが持ったんだもの」

「そしたら向こうはなんて？」

「それがね、無視するのよ、あの人！」と母はむきになって言った。「自分に都合の悪いことはぜーんぶ聞き流しちゃうんだから。髪の毛をあんな色に染めた人に説教なんかされたくない」

でも大叔母がどんな色に髪を染めていたか、僕にはさっぱり思い出せなかった。それから母親の荒ぶる魂を鎮めるべく、立ち上がった。

てお茶の準備を手伝った。「あら、ありがとう」といつになく慇懃に母は言った。しかしまたもや住む場所に関する問題が持ち出されてきたので、僕としてはすっかり食傷した気分になってしまった。折りよくぐしょ濡れになった弟が玄関のドアから騒々しく帰還し、僕はすぐさま立ち上がった。

「おかえり」

弟はぐったりした様子で、壁に背をあずけながら家の中を濡らすまいと玄関でシャツを脱いでいる途中だった。生地が肌にへばりついてうまく脱げないみたいだったので、僕は手を貸してやった。

「ただいま」とやつれた声で弟は言った。

「傘くらい買えばよかったのに」と僕は呆れて言った。

「あつても意味ないさ……そこらじゅう傘の死骸だらけだぜ——」

弟は家中に響き渡る大きなくしゃみをして、激しく身震いした。

その拍子に弟の髪から水滴がほとぼしり、そのうちの何滴かが僕の頬と額を打った。タオルを取ってきてくれないかと頼まれたので、僕はいちばん布地の広いバス・タオルを取ってきて、弟の肩にかけてやった。母が居間からなにか声を上げたが、どうやら息子の心配より雨に濡れたスーツが気にかかるらしかった。

「少し濡れちゃったな」と洩をすすりながら、余裕のない顔で弟は言った。

「どう見ても少しどころじゃないだろうが。ちようど風呂が沸いてるから——」

「いや、ちがうよ。さっき田端の家に寄ってこれをとってきたんだ」  
弟はスーツの内側をまさぐって中から古びたカセットテープを取り出し、ひっくり返して点検した。「別におれはいくら濡れたってかまわないんだから……くそ、ちゃんとかかるかな……」

一瞬息が詰まり、僕はしばらく言葉を失った。心臓を突然握られたみたいだった。

「ちよつと貸して」

テープを受け取ってみると、おぼつかない字で『ラジオ3』と記さ

れている。まさか本当に取りに行くとは。

「よく残ってたな！」と僕は大きな声を出した。

「あつて良かったよ。探すのに一時間はかかったな。途中で諦めようとも思ってたんだけど」

「すごいな……でも肝心のラジカセがあるのかどうか」

「たぶん押し入れの中にもあるんじゃないかな。これでラジカセがなかったらおれの立場がないもの」

そこへ居間にいる母から非難がましい声が届いた。びちよびちよのまま家の中に上がらないでね、と。でもその声には僕も弟も答えなかった。

「とにかくシャワーを浴びてくるよ」と気をはやらせながら弟は言った。「そのあいだに親父にラジカセのこと訊いてみてくんないかな？」

「オーケー、わかった」

ぺたぺたという足音を立てて弟は居間をよこぎり、脱衣所のカーテンをさつと閉めた。僕は居間に戻って戸口の前でしばらく立ち尽くし、深い驚きに感嘆の息をもらした。

「やっぱり信じられない」と僕はひとりごちた。

「あの子、どこにいったって？」

「田端のうちに行ってたんだよ」と僕は教えてやった。「これを取りに」

「なんなの、それ」

「昔の思い出そのものだよ」

それ以上説明するのが面倒だったので、僕は階段を上がろうと部屋を抜けた。

「あの子御飯どうするか言ってた？」

「さあ。親父は起きてる？」と僕は階段から居間に向かってどなった。

「起きてるんじゃないの」

「わかった」

嵐のせいで、家の中は妙にしんとしていた。それは僕のほんのりとした、懐かしいような気分にいっそうの拍車をかけていた。嵐の夜というのは、とりもなおさず少年の心を思い起こさせるものである。階段を上がるうち、そののろまな軋みを聞きとって、二階の部屋で父親が立ち上がったのがわかった。ドアの鍵を外しておいたのだろう、僕が部屋に入ると、ちょうど革張りの安楽椅子に腰を下ろしかけているところだった。

「なにを探してるって？」父親は手に持っていた小冊子にしおりを挟み、本棚の端に収めた。下での会話の一部を聞きとっていたのか、表情にはとりすましたところが見られた。

「ラジカセってまだあるかな」と僕は尋ねた。「いまちょうど祐二が帰ってきてさ、田端の家から古いカセット・テープを持ってきたんだよ」

「カセット・テープなんか、なんのために？」

「なんとも説明しづらいことなんだけど——いいよ、立ち上がらなくっていいからさ。場所さえ教えてくれれば」

父はどことなくがっかりしたようだった。

「廊下の奥にあるよ。去年だったか大掃除のときに見たから」

それだけ言い終えると、父は興味を失ったように椅子を回転させ、本棚からまた同じ小冊子を手にとった。

僕は一階に下りた。テーブルに載った湯飲みから、湯気が立ち昇っていた。

「なにか必要なの？」と母はたずねた。「別に急なことじゃないんでしょ。温かいうちに飲んじやいなさいよ。もったいない」

仕方なく座布団の上に腰を下ろし、お茶をすすった。なおも外では光のない雨が延々大地に降り注いでいた。そのうちになんだか体が熱っぽいような気がしてきた。

「風邪をひいたかも」と僕はつぶやくように言った。

「なあに、もう、いやだ。マスクしてよね」母はそう言うてから立

ち上がりかけた。「薬箱探してみなさい。たぶんあったと思うから」  
僕がそれに対して生返事をするのほとんど時を同じくして、弟が風呂から上がって居間に入ってきた。ボクサー・ショーツ一枚と  
いういでたちで部屋を見回したあと、僕に向かって「あった、ラジ  
カセ？」と尋ねる。これから探すところだ、と僕は言った。

「親父に聞いたんだけど、あるとすれば廊下の奥じゃないかって」  
弟はうなずいた。上で着替えるから少しのあいだ待っていてくれ  
と言い残し、バス・タオルを床に放り投げていった。母がぶつぶつ  
と文句を言いながらタオルを拾い上げ、ハンガーにかけた。僕はお  
茶を飲み干して廊下の奥に行き、こまごまと物の詰まった中からラ  
ジカセを探った。

目当てのものを見つけるまでにはかなりの時間を要した。弟は体  
を支えるように僕の肩に手を置いて、「どう、ありそう？」と尋ね  
た。

「あの奥にたぶん……」と僕は不自然な体勢のまま言いかけた。

「代わるうか？」

「いや、いいよ。もう手が届く」

そこにあるものたちと同様、例に漏れずラジカセもたつぷりと白  
い埃をかぶっていた。時代遅れのラジカセは無駄に大きくて重かつ  
た。そのときふいに懐かしい記憶が蘇った。子供のころ、野球中継  
が途中で打ち切られてしまった場合なんかには、よく家族がこの古  
びたラジカセの前に集まって試合を観戦したものである。僕は母  
親の断固たる意見もあり、それを一度わざわざ外へ運び、玄関の庇  
の下ではたいた。

「どうしようか。二階へ持っていく？」

それがいいということになった。僕らは騒々しい音を立てて二階  
へ上がり、昔に僕の使っていた部屋に入った。部屋にはシーツのな  
い丸裸のベッドと、隙間だらけの本棚だけが残されている。やはり  
こちらにも埃にむしばまれており、まるで本棚は乱杭歯、ベッドは皮  
膚を剥がれた腿といったところ。

僕はベッドの上に腰を下ろした。コードを伸ばして差しこみ、スイッチを入れると、仄赤い光が黒い塊のごつごつとした表面に浮かび上がった。このラジカセは父親が大学の入学祝いに両親からもらったものだ、というような話を、いつだかに父自身から聞いたことがあった。だとすれば実に半世紀ばかり昔に製造されたものということになる。

弟はカセット・テープに何度か息を吹きかけ、それから慎重に差しこんだ。僕が再生ボタンをまさぐると、弟の手がそれをさえぎった。

「ちょっと待って」と弟は弾むような声で言った。「どうせなら電気を消して聴こう」

「どうして？」その唐突さに僕は思わず吹き出してしまった。

「だってほら、なんていうか、昔は真つ暗な部屋で録音して聴いたじゃないか」と弟はたどたどしく言った。「ばれたら怒られるからって、二人してさ、まだこのうちに二階がなかったころの話だよ」

「覚えてるよ。わかった。消そう」

僕は立ち上がって電気を消した。部屋には切り絵のように窓枠が白く浮かび上がった。

「これでいい？」

弟は薄闇の中でうなずいた。僕はふたたびベッドに腰を下ろした。闇の中で弟の手がラジカセに伸び、やがてなにかの擦れるようなおぼつかない音が漏れだした。鹿爪らしい沈黙のあと、意を決したように声を出す。

## 最終話

＊

……ハローハロー日本中のみなさんこんばんは……ねえ、ちよつと声大きい……ほんとに……ほんとだよ、もし起きてきたら……じゃあもう一回……

（くすぐり合うような笑い声）

……駄目だよ、ちゃんとやれって……いーま自分だって……いくよ……ハローハロー日本中のみなさんこんばんは……

（耐えかねるような笑い声のあと、もぞもぞと聞き取れない声）

……ハローハロー日本中のみなさんこんばんは……兄の裕樹と……弟の祐二です……

今日は七月二十九日です……今日は七月二十九日です……さて、三度目となるラジオ天才兄弟のお時間ですが、祐二くん……はい、なんでしょう裕樹くん……ゲストの今村海斗くんはどこに行ってしまったんですかね……そうですね、今ごろはたぶんぐーすか寝てるんじゃないでしょうか……では今回はゲスト抜きということでは……はい、そうしましょう……

（紙の擦れあう音、なにかを指示する声）

……では早速お便りコーナーです……はい、今回は……ちがうよ、そこはおれだから……あ、ごめん……お便りコーナー、今回は五年一組の佐原俊和くんからのお便り。最近学校で飼っているうさぎに

元気がありません、どうすればいいでしょうか……うーん、どうすればいいでしょう、裕樹くん……そうですね、うさぎは寂しいと死んでしまうらしいので、佐原くんがもつと傍にいてあげればいいんじゃないでしょうか……人形を近くにおいておくとかね……人形じや駄目だろ、やっぱり人間じゃなきゃ……そうかな……というわけで次のお便り……はい、お次は僕からのご紹介。石井和馬くんからのお便り……なになに……いつも楽しく聞いています……どうもありがとう……このまえ遊びに行ったとき、ゲーム機を踏んじやってごめんなさい、また遊ぼうね……気にしてないよな、そんなの……うん、全然……気にしてるの……してないよ、本当……というわけで僕たちは全然気にしていませんので、また遊びに来てね……待ってるよ……えーと、あとは……あとは誰にも教えてないよ……そっか、じゃあ次……

（紙の擦れあう音）

……いいよ、あいつのことは……でもみんなに嫌われてるし……いいよあんなやつ……おれも大嫌い……死ねばいいのにな……うん……ここで一回テープ止めちゃおうか……うん……ねえ、いま和室で物音したかも……え、嘘……

（沈黙）

……やばい止めて！ お母さん起きてきた……スイッチどこ？  
ねえ、行かないで行かないで……

（ドアを開ける音、不自然な沈黙）

……もう、こんな時間になにやってるの……ほらほら、出てきなさい……お母さんごめんなさい……裕樹はどこいったの……なん

だそこにいるんじゃない……祐二隠れるの遅すぎ……ごめん……なあに、これ、なにやってたの。もうスイッチ切ってよ……スイッチどこだ……もう、寝られやしない……なにやってるんだよ、まぶしい……ちがうの、この子たちが……

\*

テープに録音された声が終わったあと、長い沈黙が辺りを覆っていた。まだなにかが残されているかもしれないという期待と、淡い感傷とが、どちらの胸もいっぱいにしてしまったのである。カチンという合図でテープが逆回しになったのを潮に、弟が立ち上がり、部屋の電気を点けた。僕らは思い思いに体を伸ばして、互いを見た。それからあまりにも哀しく笑った。

「あれ、どっちがシナリオ書いたんだ？」

「さあ。でもひどかったな」

「せっかくだからおふくろにも聴かせてやろうか」と弟は言って、僕の隣にまた腰を下ろした。「どうしよう。下に持っていって――」

「いや、もう少しここにいたい」僕は大きく息を吸い込み、吐き出した。頭にもやがかったみたいだった。「……まるで長い眠りから覚めたような気分だ」

「もう少して永遠に眠っていたかもしれない」

「そうだな」と僕は同意した。「今まで思い出したことすらほとんどなかったんだもの」

僕らは失われた年月について回想した。近所の駄菓子屋で段ボールを山ほど分けてもらい、坂を滑ったり、林の中に敷いて自分たちの陣地だと主張したあのころ。真夏に汗だくになりながら自転車に乗ったりもした。あるいは友だちの家を渡り歩き、気づくとすっかり大人数になっていたこともある。ときには健全な子供らしく、触れてはならぬものにも興味を持った。それらの情景は、今となってはまるで遠い昔に見た印象深い夢のように淡くつたない。

「それで」と弟は言い、漬をすすりながら手持ち無沙汰に瘦せた両手を擦り合わせた。「今日は誰のところに行ってたの、結局のところ」

「昔の彼女のところ」に」と僕は答えた。

「おれも見ることがあるって言ってた？」

「言ったよ」

「で、誰なわけ」

僕は名前を教えてやった。弟は記憶を探るように口を半ば開きかけた。

「……覚えてないな、やっぱり。でもどうして今さら？」

「同窓会の報せがあつて、それであの子がうちに電話してきた。昔の連絡網をそっくり保存していた人がいて、ちょうどあの子の家の次がうちだったってわけ。同窓会には行かなかったけど、それからちよくちよく連絡を取り合ってる」

「なるほど」それから弟はあつさりと話題を変えた。「それで兄貴としてはうちに住む気はあるの？」

「あるわけないだろう——あれ、なんとかとしてくれよ」

「おふくろ？」

「いっしょに住みたいのよくはわかるんだけど」と僕はため息をついた。「おれはもうこっちに住みたくないんだ。あまりに嫌な思い出が多すぎる」

「でもいまはいじめられっ子じゃない」

「いや元々そういうわけじゃ——ただあのころは気を使いすぎてたんだ、何事にも」

説明しがたい緊張が、二人のあいだを走った。弟は誰もがそうするよに、僕の言いわけを逃げ口上みたくとった。

「もうみんな大人になったんだし、いまさら兄貴から金を取るうなんて考えるかな」

「考えないと思うよ。でも怖いんだ。信用しきれない」そうは言ったものの、自負心のために、やはりきちんと事情を説明した方がいい気になってきた。「いや、だれかれ構わず金を貸していた自分

が悪いんだけどね。ただ世間知らずだったというだけのことさ。それで色んなものが破綻した」

「破綻？」

「ああ、なんていうか——つまりは友だちが知り合いに変わるっていうことだよ」

弟はちよつとした驚きに打たれている様子だった。眉間に神経質なしわを寄せ、「ええと……」と口走る。言葉を見つけれないようでもあった。

「じゃあ金を取られていたわけじゃないの？」

「違う。正確にはね。あいつらがどう思っていたかは別にしていふことだけれど」

「なるほど——いやまさか」

「おれは思うんだけどね、悪っていうものは想像を遮断することから始まるんだ。そう考えると、悪っていうものは誰の身にも潜んでいることになる」

「ああ、ちよつと待つてて」いくぶん取り乱しながら、弟はあわてて口を挟んだ。「いま下からなにか持ってくるから……もしかするとおれは兄貴に対して決定的な誤解を抱いていたことになる」

その夜、話は長く続いた。コーヒを二杯分持つて弟が戻ってくると、交換し合う言葉ひとつひとつにもさらに熱が入り、どちらも「どうしていままでそれを話してくれなかったんだい？」とばかりに、目に不思議な驚きを湛えていた。もはや嵐も二人の耳には入らない。そのうち、弟の表情に遠い記憶でしか覚えのない、独特の光が戻ってきた。それは全幅の信頼にも似た輝きだった。

「いや、けれど」と言いかけ、弟はなんとか言葉をつごうとするが、それは哀愁のため息にとつて代わる。「……まさか兄貴にそこまで考える頭があつたなんて。失礼な話、不甲斐ない人だと思っていたから」

弟の言葉に少々胸を痛めながら、僕は深く息を吸い込んだ。

「何度も言うように、おれは誰にも媚びたりした覚えはないよ」と僕は言った。いまではきちんと自分の声で弟に語れるようになっていた。「そういう人間を軽蔑するように心がけてきた。いや、もちろん軽蔑してはいけないとも感じていたんだけれどね。でもそうしないことには、うまくああいっ連中と渡り合えなかったんだ」

「そうか。いやでも本当に——なんか笑っちゃうよ」

弟の笑い声に、僕の笑いがかぶさった。気恥ずかしくもあり、同時に感動を覚えてもいた。あまりに臆面なく自らをさらけ出したことを、多くを語りすぎたことを極まり悪く思いながらも、同時に弟と分かり合えたことに感動を覚えてもいた。

「これでやっと胸のつかえがとれたよ」

「明日出るの？」

「その予定だったけど、もう少しゆっくりしていてもいいかもしれない——ちよつと待ってて」携帯電話が鳴っていることに気づき、僕は立ち上がった。「すぐ戻るから」

「いいよ、ゆっくり電話してきて」

僕は部屋の外に出た。

「……もしもし？」

「もしもし。おはよう」

ひとみからだった。その声は上ずりながら、同時に冷静であろうと努めているみたいに聞こえた。

「おはよう。いまは何時？」

「朝の四時半。あれからわたし、一睡もできなかったの」彼女はそう言うってから、気まずそうに付け加えた。「……別に君のせいにしてるってわけじゃなく、ね」

「わかるよ」と言ったが、頭は別のことにとらわれていた。驚くことに、僕らはあの部屋で酒を飲むでもなく、二三杯のコーヒーを口にしながら五時間ほど話し込んでいたことになる。

「ねえ」

二人の声がそろった。そろって黙り込んだあと、僕から切り出し

た。

「昨日のことなら気にしてないよ」

「ごめんなさい、わたし……」

「いや、それよりきちんと話したいことがあるんだ」両親の眠る寝室から少し離れようと、僕は階段を下った。窓の向こうには晴れ間が見えた。「今日か明日に少し時間を作れないかな。昼でも夜でもかまわない」自分の声が弾んでいることに、僕は気づかされた。「いま外を見てる？ 雨が上がったみたいだよ」

「そう、いまちょうど窓のそばに立ってるの。なんだか機嫌がいいみたい」彼女の声もしだいに明るさを取り戻していった。「それなら明日君のおうちにおじゃますることにする。何年ぶりだろう！

おば様は元気？」

「元気すぎるほどね」

「あら」ひとみは思い出したように声を上げた。「でも今日には帰るんじゃない？」

「いや、下手をするとはばらくはここに留まるかもしれないよ」

「すごい気の変わりよう」

「本当にそうだな。自分でも驚いてるんだ」僕らは二人とも笑った。懐かしい思い出がいちどきに胸に溢れた。「こんな気持ちになるのは本当に久しぶりだよ。弟に感謝しなくちゃいけない」

「弟くんがなにかしてくれたの？」

言葉がでなかった。説明しようと試みて、口を半開きにしたまま、自分がいままさに身動きもとれないほどの感動に打たれていることに気づいた。体が病的に震え始めていた。息が詰まり、目の奥から涙が溢れた。それは脈打つ生命の輝きそのものであり、長いあいだ忘れかけていたものたちのかけらだった。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない……本当になんでもないんだ」

泣いていることをごまかそうと、また止めどない涙を少しでも飛ばそうと僕は窓を開け放った。冷えた地面と上空の暖気が混ざり合

い、一陣の爽やかな風が頬を打った。そこには、たった今までどこかに閉じ込められていたとでもいうな、芳醇な夏の香りが満ちていた。

「窓を開けてみて」と語りかけるように彼女は言った。「すごくいい風が吹いてる」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9794d/>

---

夢を忘れた眠り（午前零時の再放送）

2010年10月8日15時44分発行